



No.32

# げんきカエル



## こども病院ニュースレター

### 新年のごあいさつ

## 「兵庫県立こども病院の さらなる発展をめざして」

病院長 丸尾 猛



新年おめでとうございます。

当院は昭和45年に全国2番目の小児病院として開設され、創立41年を迎えます。こども達の最後の砦となる高度専門医療は、昼夜を問わず大きなマンパワーを要し、採算がとれにくい分野であります。しかし、小児周産期の診療報酬改定が原動力となり、平成20年度に開設以降初めてプラスに転じた当院の収支損益は、平成21年度にはさらに大きくプラスに転じ、平成22年度も一層改善される状況で平成23年1月を迎えることができました。これはひとえに、「経営の質」と「診療の質」は車の両輪であるとの考えのもと、「待ち受ける医療」から「集める医療」へと姿勢を転換し、積極的にご協力下さる職員の皆さまのおかげであり、感謝の気持ちで一杯です。

当院では常に45名前後の患児が人工呼吸管理下にあり、最近では老朽化した本館4人病室に複数台の人工呼吸器が入りこむ状況となり、総合病院では想像できない別世界の臨床が動いています。全国29小児総合医療施設の中で矚目される実績を誇る当院の高度専門医療を、老朽化した本館を舞台に建替え供用開始予定の平成29年まで維持するのは難しいと感じ、1年でも早期の建替えに向けて県当局のご理解を仰ぎ、実現に努めることが病院長としての責務であると感じています。

その目的にそって、昨春に新病院構想検討委員会を発足させ、他府県の小児総合医療施設を見学して各部署からの意見を集約し、将来を見据えた新病院のビジョンについて意見交換を重ねています。

一方、設計専門家による調査によって兵庫県が誇れる新病院の現地建替えが可能であることが判明し、移転建替えとのメリット・デメリットにつき県当局で検討が進められています。

昨年、当院の懸案であった駐車場問題は医師公舎を撤去しての駐車場拡大とゲート管理化によって解決し、同時に老朽化した「母と子の教室」は「研修センター」にリニューアルされて、地域医療支援病院に相応しい施設整備がなされました。また、年末には本館玄関の周辺整備がなされ、つらい思いで来院されるこども達とご家族に笑顔がひろがる玄関ロビーへとリニューアルされました。当院の懸案事業に大きく舵をきって下さった病院局のご英断に感謝の気持ちで一杯です。

また、昨年11月には当院の若手医師・看護師研修を毎年受け入れていただいているシアトル小児病院から副院長、新生児学教授他6名の皆さまをお迎えしてジョイントセミナーを開催し、産科部門ではSabrina財団の支援によるクリーブランドクリニックでの研修受け入れがスタートしました。海外トップブランドの病院での研修をベースとした実践的な国際交流が職員のモチベーションアップにつながればと期待しています。

新年を迎え、皆様方にとって素晴らしい一年でありますよう祈りますと共に、今後もより一層の医療連携をお願い申し上げます。



## 脳神経内科の紹介

脳神経内科医長 永瀬 裕朗

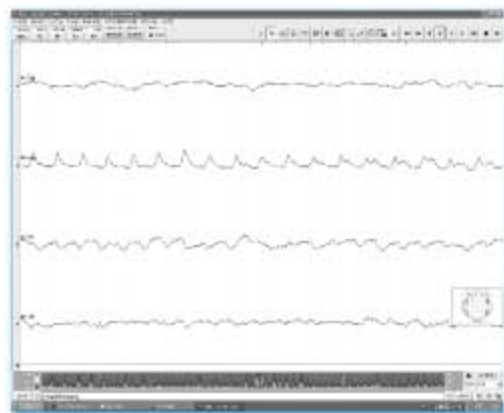
脳神経内科が対象とする病気は、てんかん、熱性けいれんなどの発作性疾患、神経発生異常、先天代謝異常、神経皮膚症候群、神経感染症、自己免疫性神経疾患、脳腫瘍、脳血管疾患、神経筋疾患、脊髄疾患、末梢神経疾患、発達障害など極めて多岐にわたります。

その中で私たちが特に重点的に取り組んでいるのが、てんかん重積状態です。てんかん重積状態とは、脳の電氣的興奮が引き起こす発作が止まらなくなってしまう状態のことを指します。てんかん重積状態という名称からは、「てんかん」の患者さんに起こることのように聞こえるかもしれませんが、それだけではなく熱性けいれん、頭部外傷や低酸素状態などさまざまな出来事が契機となって誰にでも起こりうる状態です。てんかん重積状態は神経分野においては最も緊急を要する病態のひとつで、当院が担う小児三次救急医療の分野においても比較的頻度が高いものです。

てんかん重積状態は従来外見上の症状や、血圧、脈拍などのバイタルサインと呼ばれる特徴をもとに診断されていましたが、1990年代以降連続脳波モニタリングを用いて評価するという方法が欧米

を中心に報告されるようになってきました。連続脳波モニタリングとは、脳の電氣的活動を長時間連続して監視し続けるシステムです。その結果驚いたことに、臨床症状と脳波検査で得られる発作がしばしば一致しない、すなわち見た目では何ともないのに電氣的には発作がずっと続いているということがあるということが分かってきました。日本の小児科臨床でも次第にこうしたことが認識されてきており、救急場面で意識状態が悪いお子さんには脳波検査を行う病院が増えてきています。

当科では平成15年度より救急病棟、平成19年度途中よりPICUにおいて、救急集中治療科の先生方の協力を得て、てんかん重積状態や意識状態の悪い患者さんに対して脳波モニタリングを行っています。当院はPICU環境で脳波モニタリング監視体制が整っている県内唯一の医療機関です。現在では同時に3列での脳波モニタリングを行える体制で、24時間いつでも対応できるようになっています。私たちがこれまでに評価した患者さんのうち約30%で、無症状の電氣的発作が確認され、治療方針の決定に役だってきています。



左：PICUにおける脳波システムサーバ

右：連続脳波モニタリングで明らかとなった無症状の電氣的発作



## 訪問看護ステーションを対象に研修を行いました

小児専門看護師 中谷 扶美  
一般外科主体病棟 本田 貞也

平成22年10月23日、指導相談・地域医療連携部、看護部の合同企画で訪問看護ステーションを対象に研修を行いました。当日は、56名の参加があり、こどもの呼吸ケアについての講義の後、入院中のお子様・ご家族、呼吸ケア部会の皆様のご協力のもと、病棟で実際に気管切開部のケアや入浴などを実際に見学していただきました。その後のグループワークでは、小児を訪問する上で困難なこと、工夫していることなどが話し合わせ、大盛況でした。参加していただいた方からは、「今まで小児の受け入れが不安だったがやってみようと思った」「とても貴重な機会だった」などのご意見をいただきました。

小児の専門病院として地域への教育的役割を果たすと共に、こども達の退院後のサポート拡大のため、取り組みを継続していく予定です。



### Concept

コンセプト

#### 基本理念

周産期・小児医療の総合施設として、母とこどもの高度専門医療を通じて、親と地域社会と一体になってこどもたちの健やかな成長を目指します。



#### 基本方針

1. 患者の権利を尊重した医療の実践
2. 安全・安心と信頼の医療の遂行
3. 高度に専門化されたチーム医療の推進
4. 地域の医療・保健・福祉・教育機関との連携
5. 親とこどもが一体となった治療の推進
6. こどもへの愛とまことに満ちた医療人の育成
7. 医療ボランティアとの協働による患者サービスの向上
8. 継続的な高度専門医療提供のための経営の効率化

## 編集後記

昨年は、春の長雨にはじまり夏の猛暑と体調管理にもひと苦労する一年でした。

さて、今年はどうな一年になるのでしょうか。

本年も「げんきカエル」は皆様のご協力のもと、今まで以上に喜んでいただけるような情報を提供していけるよう努力していきます。

編集委員長：橋本ひとみ

編集委員：田中亮二郎 木村 弘子 武川 元美

谷本江利子 四元 寿江 服部 真吾

赤松 規子 長尾 洋

本誌に関するご感想・ご希望・ご質問はこちらまで



兵庫県立こども病院

周産期医療センター 小児救急医療センター

〒654-0081 神戸市須磨区高倉台1丁目1-1

TEL 078-732-6961

FAX 078-735-0910(総務課)

FAX 078-732-6980(予約センター)

URL: <http://www.hyogo-kodomo-hosp.com/>

E-MAIL: [info\\_kch@hp.pref.hyogo.jp](mailto:info_kch@hp.pref.hyogo.jp)